



俳諧新五百題

二



新々五百題下卷目錄

神祇之六

神 伊勢神 加茂神 七福神 稻荷 荒神

宮 祠 拜殿 花表 笠木 瑞籬

注連 幣 御手洗 神酒 獅子頭 神馬

奉納 神棚 宮守 祢宜 巫女 梓女

事觸 鬼 教無常之七

教無常之七

寺 山寺 辻堂 院 坊舎 伽藍

方丈 寮 山門 塔 佛 諸佛



角大石 念佛 談義 江湖 五戒 六道

經 珠數 笈 僧正 遊行丈 僧

禪門 尼 山伏 薦僧 順礼 施行

放生 陵 塚 墓 彌醜 葬

哀傷 追悼 追善 年回

戀之八 初戀 待戀 忍戀 逢戀 不逢戀 別戀

恨戀 春戀 夏戀 秋戀 冬戀 方違

寄源感戀 長恨歌 王昭君 妾 傾城 遊女

傀儡女 舟君 辻君 男色 小公女

人倫九之上

武士 局 小姓 檢校 醫師 烏帽子折

閑守 鳥守 船頭 橋守 門守 山守

野守 渡守 樋守 笈士 牧童 松葉搔

番匠 屋根膏 壁塗 木舞搔 疊指 銀治

鑄物師 紺搔 紙漉 籬掛 米搗 臼彫

篔作 扇折 表具師 鏡磨 元結元結 髻屋

山人 抄 獵師 海士 塩搔 漁者

網曳 釣人 鳥差 鐘持 宿曳 伯樂

馬 馬 博郎 馬士 牛飼 駕兒 髮結

市 商人 杜氏 酒賣 樽拾 酢賣
肴賣 塩賣 古手賣 花賣 放下師 舞子
藏場 琵琶師 座頭 乞食 盜人

人倫九之下

親 父母 父 母 垂乳女 親子
夫婦 智 内儀 女房 妻 嫁
妻子 子 娘 兄弟 捨子 男
女 爺 婆々 姥 美人 石女
友 客 顏 眼 眉 鼻
口 唇 齒 耳 手 足

禽獸臭鼈之十

髭 滕 鬚 脊中 髮 白髮 鬢
鶴 鶴龜 鷺 鸚鵡 鴻 都鳥
鳩 鷓鴣 鷺 鷺 鳩 鷓鴣
鶻 慈悲鳥 山鳥 尾長鳥 水乞鳥 鷄
鶻 天狗 虎 雀 鴿 鴿 鷺
鳥 天狗 虎 雀 鴿 鴿 鷺
猪 熊 豕 猿 兔 狸 狐
馬 駒 牛 猫 犬 狗

鼈 鼠 土 螭 蜘蛛 虱 蟹
魚 守 宮 蜃 蟻 龜 魚
比 目 魚 鯉 鮓 海 老 烏 賊
鯁 鮓 雜 嚙 魚 鮑 貝

田圃草木之十一

田 畦 畔 反 圃 林 森
木 老 木 古 木 枯 木 木 間 梢
松 松 毬 檜 楠 杉 檉
柗 楨 雁 翅 檜 椶 椶 椶
柗 柗 柗 柗 柗 柗 柗

椶 欄 蒼 寄 生 草 芝 苔 藻

淺 茅 蓬 生 藪 竹 篁 筴

篠 篤

雜之十二

述 懷 春 夏 秋 冬 閑 居
懷 旧 春 夏 秋 冬 旅 旅
春 旅 夏 秋 冬 旅 泊 旅 寐
草 枕 旅 人 旅 調 度 餞 別 留 別 首 途
贈 答 画 贊 回 文 物 名 杏 冠 祝
賀 婚 賀 初 老 賀 半 百 賀 還 曆 賀 古 稀 賀

八十

米字賀

九十賀

百歲賀

下目四



新々五百題下卷

田喜菴護物輯



○神祇之六

神祇	以喜や横川へのあふいもの神	燕村
	神あま杉野の落種年富里	保吉
	市神の極や木よゆぬ支離枝	奈彦
	るの神磯歩りいする名月を	乙二
	秋風や後るれさるゝ藪の神	梅室
	そら神よ登しもむし系曇	一肖
	おのゝと打ちし神乃蓄か	詠帰

城の衆やむのふ衆一をわすれ

一 蕙

煉とつこゆ礼中さん井戸の神

露 谷

小宗より岷岷岷の神や家の神

樗 堂

伊勢神

竊も身も少覺より神路山

卓 池

と明も二月ありや神路山

一 具

神風はあつるあやうの月

一 肖

か入を杉のせをりり神路山

叢

終むやゆふるをりり神路山

千 賀 子

加茂社

加茂へ来て捨火の所はもとまは月

乙 二

上加茂へふと来り度冬を玉

蒼 乳

加茂下上庵りるる日ふ色り

護 物

七福神 恵比壽

人丸も朝もあれうもあ 夷

巢 兆

勢もあより進十日の常は妻

素 鶴

大黒天

大黒天あゆむる松を引をあふ

巢 兆

種徳も子持ふ色り日法白ひ

星 谷

毘沙門天

西杉り神てまねや番中し

巢 兆

月あもあゆむるあめは掌

護 物

壽老人

常替の勢もあふと落し角

巢 兆

辨財

福天の法息もかれ玉の巻

全

福祿

布袋

稻荷

荒神

宮

祠

伊うう梅子ちあや福祿妻

旅傍を布袋ううう喜の水

薪部屋の隅のううう杉

氏花聖の蔭を土子のいなる

うきやうふいなる社敷の菓をう

杉むうやいなる社裏の冬棧

荒神の杉も罽れぬ雲うう

夕系風や縁をわきうう電井

まきまき荒神松の深みう

陣や荒神杉を壁の眉

ううひまふ起かけまいそ宮をう

ううひまのう子訓う宮をう

花雪の掃除志まううう

友咲く人あううう系の文

雪の文を居のううや松のる

小社と棧と赤う森の中

雪舞や石の祠の葉盒子

野の末うあう祠の染

雪う厚のうううう笑祠の

小祠のるうあれるや麻をう

全

全

みり彦

詠帰

東里

菅里

乙二

草夫

梅室

既飽

恒丸

月臺

孤米

寛雅

良女

梅室

涼谷

杉抱

豊女

もろ紀

拜

秋の田や松のをなへ十二丁

一具

秋の田や松のをなへ十二丁

隆女

秋の田や松のをなへ十二丁

露谷

秋の田や松のをなへ十二丁

露邨

花表

秋の田や松のをなへ十二丁

みち彦

秋の田や松のをなへ十二丁

胡準

秋の田や松のをなへ十二丁

宜彦

秋の田や松のをなへ十二丁

丹嶺

秋の田や松のをなへ十二丁

護物

笠木

秋の田や松のをなへ十二丁

召波

瑞籬

秋の田や松のをなへ十二丁

涼谷

秋の田や松のをなへ十二丁

巴流

注連

秋の田や松のをなへ十二丁

乙二

秋の田や松のをなへ十二丁

秋奉

秋の田や松のをなへ十二丁

卓池

秋の田や松のをなへ十二丁

一具

秋の田や松のをなへ十二丁

月露

秋の田や松のをなへ十二丁

伯先

秋の田や松のをなへ十二丁

烏頂

幣

幣

秋の田や松のをなへ十二丁

烏頂

蒼虬

田都喜

碓嶺

逸水

草雅

梅室

詠歸

士朗

乙二

卓池

みいもいとのみぬるや垣の幣

初夢や幣きくくく伊世の馬

地中へは幣のくく来るや陸を

御手洗す魚のうくりや衣衣

御手洗の月を垂しや萩の志

喜の雪神はは砕くる鳥のうら

村中へ神はは舞常あや菜のむ

春風や陸方かきくは獅子うら

菜のむの中やまふりの獅子は

ハ級や塗の出来くる獅子うら

一具

桃五

士朗

風芝

詠歸

名澄

露谷

神馬

彩のや季の獅子の踏例

言丸へ神はは起る神月神

正月や豆まうひあく神の志

いさかきく神ををひくや大世の

引出は神をいさかきや雪の峰

牽とめや永代橋も神の馬

奉納

借屋戸神社

神あま控さくく毛喰まうき

白雄

熱田踏歌 正月十日

日よの松萩を折をうらむ

士朗

熱田宮

とらう木もこころも葉茂るは近宮

みり彦

住吉四社を待す

宮よ〜〜大石をのそむるけん

今

宮嶋

薫風やうり〜立ちよの巖島

蕪村

むつ〜〜大石松や梅やあり

月丘

新を和縁ありゆるあは守柳

茶静

室引や神柳の灯り一は夜

護物

宮守

宮守のこれの支度や木瓜のむ

もろ記

宮人の良〜〜ふれ聖子

芥鉞

宮守の古い鳥居を〜〜

春路

神主の差圖はゆる田う志

露谷

祢宜

はくも〜〜祢宜〜〜海は後う

蕪村

祢宜との馬も〜〜秋

乙二

祢宜との〜〜櫓の若

如泡

新葺きや祢宜も〜〜一室

沙明

宮守や〜〜のむれを祢宜う

寛雅

巫

木は力押進〜〜や伝信巫子

扇暑

呼牛
桐雨
應
一具

梓女

まのくさし梓とのそく角力な
梓さくく垣の角さくの柳や
梓さくく表生あやなりのむ

呼牛
桐雨
應
一具

事觸

子福の来さくくまの梅のむ
子福の一むき帰るゆれうな
鬼あひまの回さの菊主存か

淡水
五岷
護物

鬼

花盗むんを鬼てなうりうま
子地くの群まなげさる鬼あひ
黄毛よ門の終る鬼乃除

抱儀
且翠
玉光
葛古

寺

○釈教無常之七

楊のむと木あささむのあ候のち
菴菜も十念もかひはちか
塔の鐘ものせたりまの海
冬うれや日のさぬける思のち
突さるるもささるぬ接か

みち彦
一具
越児
稚篁
藤枝

山寺

木末のくくつさきちたさくらり
 石梅や猿あくとけたさの縁
 梅叢や燕の白出とちり垣
 山寺や新の午初五月雲
 山寺や峰子さくれて衣更
 山寺や門を出てけし時
 山寺や忘れてあそを運梅
 山寺や魁々鳴るも交善る
 辻堂も穢くくある沙干か
 辻堂へ覽てかゝる清あか

茶静
 川城
 秋兔
 蘭更
 巢兆
 樗良
 ちん記
 寛雅
 金彦
 南壽

辻堂

院

辻堂の月ハとをむもくくつさ
 辻堂て二月けはある四くある
 初宮や院くくまきく冬
 穢和や院の梅くまき白
 多層屋敷もつらふ葉はさうり美の院
 二の目梅のさくや美の院
 梨子の初さくや手次の坊う庭
 帷子をうけてあそせうり坊う書
 木屏のうれても白小坊う書
 台次手さくくわをゆく谷の坊

護物
 月居
 玄蛙
 一蕙
 千輅
 みち彦
 谷雄
 小圃
 春路

坊舎

竹

うらしまの七巻か藍子法系

椿堂

涼しやと云々多ひくか藍子

五芳

雪のか藍子ゆづりの保めうら

田都喜

日の筋はまをらか藍子の雪

五岨

さひらさや町より虫さへ来ぬか藍

午乳

方丈

方丈をまゝ水仙やうめ法系

こち彦

方丈の砲りもの句ふお茶うら

梅室

方丈の秋結川うらう庫裏の積

乎馬

方丈のお極言うらうらうら

寛雅

寮

うらうら合ふ寮の手先や寮の尼

召波

なごりやあつあつあつあつ

太良彦

山門

山門へ葦の白濁し葉をうら

梅室

山門は西日の向ふ法生うら

巴流

押出しと塔一を心のわらわ

巢兆

塔

塔をうら一里を来り春の月

一肖

塔のうけ言うられ聖の水うら

梅老

塔をうらあつあつあつあつ

多代女

葉のあやかし葉をうら塔をうら

禾木

佛

氷りそと秋庭も置たり佛の葉

東芽

うらうらうらうら佛よあつあつ

弗水

諸佛

花の^三佛がくろく小春の
 夕白やまをり佛の依の宿
 常を^三啼きく^三藪の^三花の^三那
 春を^三く^三地花の^三法^三は^三春^三松
 五月雨や兔網干^三家^三は^三油^三枕
 水仙や山や不動の^三戸^三の^三あ^三く^三日
 雪降の^三五^三鳥^三の^三さ^三の^三月
 如^三意^三菴^三の^三白^三子^三か^三の^三花^三や^三夜^三の^三花
 早乙女の^三さ^三ひ^三く^三く^三く^三南^三大^三師
 乙女も^三ち^三り^三あ^三ふ^三く^三南^三大^三師
 女
 亀九

角大師

念佛

夕白や^三互^三砂^三を^三ん^三南^三大^三師
 花^三木^三檀^三宿^三を^三そ^三青^三の^三花^三は^三か
 意^三は^三よ^三ぬ^三く^三の^三く^三く^三く^三南^三大^三師
 明月や^三花^三は^三守^三も^三お^三り^三と^三死
 念佛の^三ま^三く^三ま^三く^三く^三お^三く^三き^三ん
 花^三曇^三を^三く^三く^三く^三法^三義^三の^三花^三り^三啼
 種^三前^三も^三流^三く^三立^三ふ^三く^三法^三義^三
 花^三葉^三や^三江^三湖^三は^三花^三舞^三法^三雨^三の^三花
 花^三く^三き^三ん^三啼^三や^三海^三手^三の^三江^三湖^三と
 花^三葉^三の^三花^三も^三流^三く^三く^三花^三の^三花
 北冥

江湖

五戒

英九
 塞馬
 田美
 乙因
 世南
 卓堂
 龜蓬
 卓堂
 女
 亀九
 茶静
 斗入
 秋奉
 茶静
 應く
 小圃
 圭洲
 古
 政二
 一肖
 北冥

北光庵

潤三

全 邪婦戒

淫華五つが経、くさる去薪也
来好を十とまされ、怖を取虫
女宿切さく聖、わいとく、子枕

北光庵

詠婦 護物

全 偷盜戒

お新死とめく、勝や春法、月
花折も、切りも、ぬ枝、ゆれの竹

其堂

全 忘語戒

五とく、まも、ひら、ま、子の香
木、お、お、と、は、さ、く、ま、り、初、ぬ、妻

北冥

全 飲酒戒

き、り、く、い、よ、く、ゆ、く、夢、の、虫、あ、れ、と
茶、よ、と、思、く、く、ま、り、う、業、の、お、お

露谷 護物

六道 地獄道

者、る、局、の、中、い、ま、く、く、や、蚕、の、繭

り、風

全 餓鬼道

山、蟹、の、温、泉、壺、子、落、る、沙、皇、衣
羽、も、ぬ、れ、ぬ、水、乞、を、法、界、り、な

ろ、風

全 畜生道

ま、り、子、や、虫、法、さ、り、き、お、表、の、明、る
去、く、く、や、魚、乃、骨、う、む、盲、夫

露谷 保吉

全 修羅道

秘、花、猫、身、を、知、る、角、小、儒、ま、り
相、お、ま、わ、友、う、い、破、る、ま、り、く、次

五明

全 人道

妻、う、く、あ、く、夢、を、瘦、ま、り、孝
人、の、世、や、夢、も、法、の、初、り、ま、ら

露谷 保吉

く、り、く、り、く、り、く、り、く、り、く、り、く、り

東岬

天

竹のささる聖井の風の薫るく
露谷
秋のあはれはく人月の鏡外
車来

經

普門品
觀其音声

閑くくも目よりはくはくはく
午心

皆得解脱

糸くくも緒うけくくも松の福
諫圃

即得浅處

梅桂少々の知も咲も夕暮
完来

衆人愛敬

春もあまのつもほくわくの山も
對山

火既變成池

ゆえいつる蕨あゆまのしる道水
守三

住 如日住虚空

さる眼はハ立くをれも不二の空
護物

寂然得解脱

人間くくもたあくあは裸虫
寥松

還着於本人

あけくくも春やむつきをかよとく
北元

時悉不敢害

春をくくもはくはくの道もく
確嶺

摩訶般若方便

夕立や笠うりかたの工風を以て 成美

無利不現身

阿倍紙の梅のこころや月一ツ 大梅

悲観及慈観

老蓮の葉や糸を垂るが如くむ 有月

慧日破諸闇

簑ありふ能く雪を来しは雪 松欣

衆怨悉退散

多層の葉の目も花よりやをわが果 樂只

梵音海潮音

耳そけ画する腕も初々法 三宅彦

念く勿生疑

陽空を仰ひぬ日あるは春の草 不尽

提婆品 竜女成仏の心を

風をやはわすれはあさりの糸柳 のみ彦

如是本末究竟等

いさよのや水もゆきもいと静 茶静

即心即佛

とこし 曇るまをりし蜂の夢 護物

待我閻浮同行人

君来よよしす燈かたりもくむら

一具

珠数

珠数をくするまゝの月をく津の野

屋鳥

珠数のくさ動いともあるり法を

雨塘

珠数くまを紫雲花はくくや山のる

黙巢

笈

笈居くく日月おむ河原亦

古樂

笈居くく合歌をお手は物袋帳

夜鹿

僧正

孝秋や僧正平なるるの格

一具

くくひまや僧正の心を離道兼

汶水

僧正のあまのむらさよ

一蕙

遊行上人

わの楓ありのまーあよの庭

ひら彦

尾のくくや聖ハありの園うり

護物

僧

赤僧をむさハ難のな〜ひうね

曉臺

卯のむやま〜く〜ま不殊の僧

月底

連ま〜く僧運ま〜く小妻〜のな

葛古

老僧のそ〜く〜られま〜を桂の子

表丁

宗合は僧も〜ゆ〜や花の角

箕山

旅僧

旅僧の月と連〜り聖中か

ちん丸

園裁く来る旅僧や妻の角

真侶

焼骨ノ折〜り〜あり白〜

淡水

禪

禪の心長きりまのりは標うる

とち彦

給着てまのりけし業門

梅室

律のふとをきう海芒う那

涼谷

尼

尼う戸のちめうるうし露か

其来

あしきまや宿さくさぬ比丘尼古

真澄

洒掃む尼もあまうりやさくら

炉扇

要あり次尼前もこゆる落葉か

茶静

山伏

山伏のよう定めくまおの雲

可都里

山伏のまのうら村や藍のむ

芦舟

四五人の山伏色ぬまのつきま

詠帰

山伏の門も極るやなきう那

梅壽

山伏は灯をさくさくはる本立

真侶

薦僧

薦僧は馬うも里のうこれか

谷雄

竿や薦僧が法度書

車来

薦僧ハ業ハ疎まき友のむ

青龜

順禮

順礼や二王のまは縁を位

保吉

順礼の首まうけたる標う那

素丁

順礼の子もあそひり杜の

孤米

施行

是あは施行あまふや梅の門

丹嶺

君のいり来まうさきと施行か

詠帰

放生

放生の鯉、ゆるおおとぎん

護物

放生の秋もあをそ、池の鴨

道彦

放生の時月もあをそ、れ魚と水

護物

三所きの松、あをそ、池の鴨

蓼太

陵もわ、の葉の裏やも、は亭

卓池

町中の塚の茂りや、若くは

露谷

垣あは、庚申塚や、友木立

草雅

卯の卯や、とせのう、の祭、塚

良女

おろ、のや、盆、の、墓の松

蝶夢

墓

稚子、の、や、火、焚、の、墓

与人

墓の松、あを、そ、の、時、有、り

多代女

古墓や、素生、あを、そ、の、雨

了、

よ、き、の、や、り、け、る、墓、田、ひ

露谷

一休、の、二、日、あ、る、一、翳、翳

保吉

夕、白、の、そ、れ、り、翳、翳、り、林、の、き

蕪村

い、ち、の、葉、や、翳、翳、り、え、そ、る、狐

露谷

菜、の、あ、や、す、色、り、葬、の、人

曉臺

夕、う、の、や、荒、葬、る、め、く、る、児

几董

葬、の、の、田、中、と、り、や、雪、の、峰

道彦

葬

翳翳

葬

全五

追悼

葬のりなきそと山根の照射小

塞馬

悼友人吐燕

友榮の茶とくうぬ恨さうね

白雄

書を先ひり人かあくる

わきまぬぬる友の火桶うま

士朗

悼家猫

土火鉢いしくお摺ても毛はをくは

巢兆

斗入身まわりつりたる依傍の園
七うり此温泉と云ふまより
まをささるあひたる

惟茂と同一語やつむ落葉

全

母の身まわりあひり時

とりついで只子んや友の園

乙二

書を先ひりたる時

故うむらのまきくあせぬや家の秋

帘風

悼友人

亡き、教は又入る友や友あは

月臺

毫子をうしあひたる時

よくとまろや亡き子の眼は付し

魯仙

悼金令翁二句

毫子をうしあひたる時

悼歌

蓋去々春も置あそひ秋の暮 護物

悼梨翁居士

春去々々さうかり月ち初の日 全

冠山君へ奉る

いとけなき眼裏ののろれさせあふ
お歌をいへみゆきとの何れをいへ
かあまやわらふとき

月をく羽子板くわも泣日か 全

柳莊追福

月をくまあくも山を念仏 巢兆

椿南追善

咲くもあひ入函のき 月丘

追福

無説追善二句

影霧の佛とあつてむつとく みる彦

とく何そい送り生葉ん粥の味 護物

みち彦追善

明るとくくくくくくくくくく 茶静

五芳一我の墓のあひひくくく

茂る谷小根のむくくくくく 露谷

宰馬々一周忌

花を中も亡ふ日ハめくくく 暁臺

曉臺一周忌

年回

身よそやききまや初の子のま
士朗

白雄坊十三回忌

あふまの炎りもあれ思ふ日そ
みち彦

同 廿三回忌

うそとてくも物あいらりー白雄来
全

あつたおの成ゆ記りま引そひ
まわくせーもまや一めううそを来ぬ

いそうたて様も底うやうかの法
一肖

老母の一周忌

休の何より志のまん雪の杖
護物

甲斐百二居士七回忌

まのい子人の若と眼の前よ
全

○戀之八

初戀 初葉中竹菴よむる教と良
太祇

帷子や田植せしより悪もある
嵐外

まの恋よ杖よりあまのまはる
越児

待意 ちの恋の先客つくる好まうか
吐月

待意の翌よありくる柳うな
巢兆

子子と春あまうくれを曇るはな
輪之

忍意

初雪の初下結する志のひし

樗良

志のひしは山原のくさ草

曉臺

君は志のひしあさよ二日

無智

志のふねは水の家ありるの月

谷雄

逢意

凍て凍て手はうれしく逢意

儿董

春ふりハキキ陸雪の名は

醒夫

梅名一いつの世は冬ふ燕衣

田都喜

不逢意

宝川の雪は色はく何をぬ衣

儿董

斤思ひ遣うも何をさる腕うな

青蘿

春飯や何を食はぬの雪

真く

別意

雪の結あをぬ意もも此

田美

れきく雪も出口のうしり

素因

時をうしりてゆくきぬは袖

少汝

長きおろきをたつげやあ

千影

恨意

り鱗は割草をたあは

輪之

鬼灯やいさぬ恨を口のう

蝶夢

あさ木は恨をのさる氷柱

麻父

うた人より雪は送るわ

乙因

春意

控本は春所結あさるうら

白雄

他人より雪のふりつわ

吏登

三十一

夏意
 夏の来や急りよそよそ人の意
 さらけきや若くあけ一人の意
 西月の夜常よそわ深木小
 灯よそむく君よも妙なり院月
 我よつとて起り城を燒きつ良
 青梅や葉のむりしあなる怪根
 藤のむよはさきてりりかそら云
 思ふ人より風のとくかぬ庭うね
 見ぬ意の七ねうとある水鏡に
 人うつりて意のいひこし一盃二枚
 秋意
 妹うもつとて秋の意そよよたり
 我がのひきき交りも葉はうつりあり
 ちきうとちや梢の若もりく海菊
 若や志く是れ我や紅葉のまはるそ
 紅葉の星よ冷きき改中うね
 裾のあく巨艦はりのを切ひたり
 時評のり終るを一一并の完
 後歌の星の付くるふもまうる
 うね意の文年妙しや年の関
 歌う如や青く河陸ありき方遠

方遠
 淵更
 眞道
 乙二
 芦涯
 几董
 多代女
 茶静
 獲物
 春鴻
 士朗
 可都里
 黙巢
 抱儀
 几董
 檣堂
 寄淵
 田都喜
 星谷
 春路

寄源盛

長恨歌

王昭君

妾

傾城

遊女

和の歌のなきはけみや方々

獲物

素のしる虫なきはけみや方々

輪之

梅あはるや交聖の意も云月夜

獲物

玉をくさる衣の衣毎の度うねり

露秀

うつくしやや鏡のうつくし秋のうせ

冥々

袖の衣あはるや月夜あり変

不知作者

昭君うねるや衣をけり遠ひ

詠帰

菊は岸へくさるや馬の土

淡水

暮るるや衣をくさるや月夜の

召波

宿着て衣をくさるや月夜の

曉臺

懐あはるや衣の衣あはる

壺半

梅田より妾はひるをくさるや

茶静

少あはるや衣をくさるや

夏桂

傾城の後の世うねるや

蕪村

傾城のうねるや

青蘿

傾城のうねるや

児童

傾城のうねるや

巢兆

小宿のうねるや

梅室

葉のうねるや

蘭更

葉のうねるや

葉のうねる

精之世々 舟より小室の遊女あり

多代女

二階うらひ田うきうきある遊女

二丘

歩むを一焚喉ふ遊女うら

護物

うつりも新ハあまうり秋の風

保吉

夕日てる 傀儡の鳥や秋のうせ

柳莊

傀儡女の毒魚きくは毒のる

和風

舟君 舟の位敷ゆる火神のうら

蓼太

舟君の意地は所のむ右衛門の

岐又守

辻君 辻の又やたる春の萩のそら木は

詠婦

辻君の手拭ふし一籠あくる

露谷

男色 おもむきいふあまの流のきまうら

児童

わう観 龍巻もまつりつるの秋を

みち彦

海棠や小多柄提し一青小姓

多代女

紅梅の庭は小姓の目とてえり

護物

ふゆを みるあやや二人をさるうらうら

みち彦

梅さくや赤松さくさくうらうら

寥松

○人倫之九上

武士 雪見とくゆりや武士のそら木

太抵

局

のけふの海を拂ふ折りのま
 まのふの世をわが松は梅のま
 局うら墨麻一とを五月の
 局のみあふふあり福壽子
 法局の志をうらふ多回極や
 局の梅葉の局の又う来る
 蓬葉をまふさうかく局や
 廣椽又小姓の母も菊のふ
 萩の戸子あふふぬ良やち小姓
 袴宵や席あふふりち小姓

霞江
 詠婦
 仙草
 一具
 百丸
 妙扇
 ひん
 大梅
 露船
 岐文守

小姓
吉三

檢校

檢校の鑑井多るる秋のる
 檢校のつき襟一とる玄徳小
 檢校の娘嫁入る雲衣うる
 檢校の素連てゆるあふふ
 檢校の玄関をうら小正月
 菅旦袋て村歩りゆるくはしや
 馬日鞆医者をとる聖のりあふ
 印うり人かふとる多回向
 栞堂うら藤うらや医者の家

三千彦
 秋峯
 西月
 乘化
 寛雅
 几童
 召波
 巢兆
 白養
 卓堂

医師



鳥帽子折

子親呼や出てけりあがりけり
秋の月のうらやまを思ふあがりけり

谷雄

関守

関守のうねてはのむ押うる

詠帰

関守のつうとあさやをくれ空

一首

少桶控く雲あうるる月夜秋

乎馬

関守の空もさしてあさうる

春路

島守

島守の伏家ゆきをいれおのむ

伯光

島守のあさうる数休る相一葉

護物

船頭

船頭の船頭も中し西行忌

壽翁

空を飛や船頭を者周子うる

菊女

船頭の船頭もさしてあさうる

涼谷

船頭の船頭もさしてあさうる

田都喜

船頭の船頭もさしてあさうる

露谷

橋守

橋守の船頭もさしてあさうる

召波

橋守の船頭もさしてあさうる

南馬

橋守の船頭もさしてあさうる

良女

門守

門守の素衣もさしてあさうる

芦舟

門守の素衣もさしてあさうる

護物

山守

山守の素衣もさしてあさうる

黙菓

山守の素衣もさしてあさうる

江月

野守

山ちる痛りゝ露ふと〜れり妻

草雅

初〜くれ野ちり宵の〜葉ふ

士朗

渡守

初午や聖ちり妻の内徳有

葛古

樋守

女名る妻り名林や候〜ち

太祇

降ふるや雪を〜りて候〜ち

蘭更

川名の瘦魚を〜ぬわ〜ち

甫山

名月や柳と〜りて候〜ち

雅篁

樋守

初冬や樋ちり宿の小餅汁

芦舟

河岸や樋ちり屋森長〜り

春記

笈士

い〜ちり足のと〜りぬ名盡

太祇

笈士の暖味も〜る命うけ

几董

笈士り妻もや笈〜り日よる

素鶴

牧童

字菊の〜り手ちりおきん

大巢

字川の橋も〜り〜り例候

碩布

字うりの聖ハ露の聖風うけ

迦孫

松葉搔

此大姥の手傳ひ鳥や松葉搔

寄淵

さ〜むのけりも〜りぬや松葉搔

一樓

松山や花のけり〜りの松葉搔

真侶

番匠

番匠り枕つ〜りや〜り此書

椿堂

陽春此世り明〜りや老大工

素郷

省吾 昔より暮れしうれなる大子也

一具 三の川車ち工とをちりて暮

詠婦 菖葉を搦つて並大工也

呂波 屋根ふきの上をハ下るる也

みち彦 屋根ふきの見おむやまやう

豊女 舟のあひの喉を屋根ふく

保吉 する日や左宿漫とく五月雨

露丸 壁ぬり紅足代くくわりのる

甘月 壁ぬりのうらふ物く柳也

一具 るまればや情ふされし木葉う記

木舞撥

壁塗

屋根骨

少なきおうりもさるる木葉撥

畳指

妻の日は空をくくはやも

あちさあや良休とのも

雪屋もちるやふ云や月の白

空梅の日はくかたりも

虫干や名葉くくのも

新鳥や五十色くく刀

もの忘の紙治う空法し

紙治う空のこをて

何少名をとり紙治う

護物

月臺

田美

泳婦

其翠

護物

宗讚

屋烏

首丸

政二

銀治

亦

上

鑄物師

こそこいしや液法を結うとひあ

車来

蓼の種のをしむ新や漆うけ朱

輪之

漆うけ漆の砂子に庭や梅のや

箕山

紺搔

紺うさく糸落うられや木林楊

几董

紺うさくの糸起んうけや秋のる

大江丸

山火く芍薬植る紺屋小

六倉

新風や紺屋う門の初懐

大梅

初年のそは紺屋の糸落う

淡水

糸漉

糸漉の糸は出歩りそうる

成美

紙漉もる糸あられや並落る

みち彦

籬掛

糸の糸や紙子に極はほむ家

東芽

紙漉のひくいおまや障りまむ

史遊

糸漉の糸まをうさふふをう

護物

夕鳥や籬うけ泊る糸をい

三彦

籬うけのむらゝ起るやうめのも

多代女

籬うけのね起しゆく杜那うる

露谷

籬うけの糸あを掃てけ月見や

良女

米搗

米搗の糸をうつる落葉うる

太祇

糸ろるき米搗とのよあられ梅

蓼太

糸をつく糸不落るる木槿うる

迦孫

古

三二八

白彫

米器のうしろと表のや表のる
むよそとこやまを優し白彫し

小圃
と彦彦

白彫のこまめし時や落桂

古翠

白彫のりあこまをるをまうな

秋菜

籠作

あまらやまをりくと籠造

葵亭

夕うねや扇掃うける籠つくり

護物

扇折

佐保姫のまをりこや扇折

且々

扇折人ふくくらん表の夢

卓二

おのりの方の汗をい知く扇折

霞江

星の表をゆをひうも来よ扇折

良女

表具師

表具師のまはは河原の炉のまは

几董

表具屋の夕飯をやきまをり

一具

鏡磨

かみ磨ち町のそく落葉介

巢兆

此こまや扇とこまを扇の後磨

椿堂

おのりの山のおまをりかこ磨

迦孫

元結死

おまをりや元結こまのり度里

梅塙

鬼灯やうの境あまこ元結こ死

松黒

おまをり元結あまのりつこま

菊角

髷屋

おまをり門あまへたりかり店

秋拳

髷屋の灯うけも星をゆ表作

護物

山人

子をりぬ山人をあり一芒刈
山人を音聲ほらまうその川
山人のよひつゝおの木洞のうね
うらひをふちや山人の大本むく
障ありや日のさん松のかり柱
夕暮おや岩道は清身の松の虫突
獵男あり火のさきや男荒鳴
狩人の羽ありき杖も氷のさき
山茶花や狩人も東市の松
獵人の初をふまふ松山小

泥中 一肖 星谷 久城 甘月 護物 恆丸 木雄 北園 雪老

松

獵師

海士

漁者

塩搔

暮子獵男の母の音聲のり
蟹の蟹喰のさえまらと蟹 狩
海士の能まねお海も志のり地
けまや蟹の籠のかとら
海舟の蟹うきうきる音うき
春風や蟹うき舟の船仕事
塩うきの歌のうきや蟹の蟹
塩うき小音をうきうき音うき
塩うきハハハをうきや秋のうき
秋うきや海味はうきうき漁者

露谷 方明 騏道 葛三 世南 月丘 太良彦 菊角 碩齋 蕪村

釣人

釣人の森南の柳

多代女

網曳

網曳はこゝろさうあぬ暑うま
りく川の森まうる家やまの
網子ともいふまうりあなほ
網曳はこゝろさうあぬ暑うま

年緒 迦孫 春器

鳥指

鳥指のさうあぬ秋の山
鳥指のさうあぬ秋の山
鳥指のさうあぬ秋の山
鳥指のさうあぬ秋の山

仙斧 芦舟 名澄 林曹

鐘持

鐘持の行まはる秋の夜
秋のくれ鐘おひとる

斗入 涼谷

下

三

宿叟

彦持の馬は疾て折枯盤る
素りとり紅宿川霞む板小

多代女
茶静

伯樂

宿叟の隼は成るや冬の魂

小圃

馬医

伯樂も血をたふる冬盤る

召波

博郎

伯樂も血をたふる冬盤る

田都喜

馬士

田向の日はまぐさる医の家督

曉臺

博郎

馬送者を上はるや冬の宿

谷雄

博郎

探るや情平宿る川向ひ

季瑛

馬士

博郎の口入はるや冬盤る秋

啓山

馬士

馬士も踏もや冬盤る月の花

榛堂

牛飼

馬士の巾着あはれく木下雪

一具

牛飼

神あはれく馬士の所を子規

谷雄

牛飼

酒屋ぬく馬士の成るや冬の

春路

牛飼

狼藉はる馬士の驚り盤る

獲物

牛飼

牛士の袖をそる入梅のま

午乳

牛飼

牛飼も扇さたり花の春

可景

牛飼

牛飼の半のむ本影の清る

夏桂

鴛舁

鴛舁も舟のひかり盤る

葛古

鴛舁

鴛舁は舟をぬくるまの舟

壺半

鴛舁

鴛舁も舟のひかり盤る

南濤

髪結の紐を足す

髪結の紐を足す

髪結の紐を足す

市人の物

市人の物

市人の物

市人の物

市人の物

市人の物

市人の物

市人の物

寛雅

獲物

一具

連志

蕪村

召波

宇橋

田都喜

蕪村

乙二

杜氏

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

梅の木を五反

汶水

みち彦

一具

涼谷

ちる記

暁臺

みち彦

車来

鳥所

寛雅

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

樽拾

酢賣

菓を売く酢賣の通る田植り
まの酢は吹通て通る酢うり
まの膏の酢うりよひこむ磯
魚うりの文いそきもる名澄
肴屋まをのき出来四月うり
年五やわりの菜うり肴うり
魚うり江仕舞うり肴うり
麦秋や畑て酢あそく肴うり
をうりや塩賣のそく肴の鯉
塩うりの二三の来ぬうり

谷雄 車来 舟静 名澄 大梅 斗筵 春路 護物 保吉 車来

塩賣

占手賣

塩うり江塩賣のり
飛騨の小里入るや古手賣
批根さうや下結をいてる古手賣
まゝ魚や結もつぬ古手賣
古手賣の女房し知る難なる
初年や魚うりも並ふ山の口
魚うりもあま世のめはる酢
少里や桔梗をうりや賣ふ来り
肴をうりや賣ふり時を
毎月や魚賣は来り小百姓

菊角 奥うり 迦孫 真侶 禾木 保吉 みち彦 葛三 西月 芦舟

花賣

三二日

放下師

まひくうあつて一板の終

月

とち彦

放下師は市の引くる二月廿

とち彦

放下師はちりもむふりあゆの五

弄山

松うけは放下果てて後乃

致山

放下師の繩張りては柳

禾木

脱うけの袖や花見る舞子とも

召波

舞子やまれば就ある白梅子

几董

竹音やかこの酒をむる梅子

みち彦

梅子一唇口うくは白梅子

炉扇

戯場

ハ彩や舞子うくくる縁芝居

涼谷

舞子ととや影舞妓の二の初り

茶静

琵琶法師の夢さぬりや琵琶法師

几董

門くの巻りもくくや琵琶法師

獲物

埋さすや舞妓されくる坐の坊

米友

りち播や例りて来る坐の坊

壺半

こもくと坐の舞子より舞妓

真侶

石拍子も坐の舞子や坐の中

獲物

乞食の歌は八人の心を梅乞食

士朗

乞食の歌は梅乞食の入り

孤山

乞食は小袖を巻くも花

團釈

琵琶法師

座頭

乞食

盗人

松うけや乞食も藤ふらその川
萩の終り門の乞食も月と云
よみ梅と梅盗人は巻くれ
お盗人こそりのひふ宿うさん
ほあがりや鬼灯盗む尻被

星谷
梅壽
鶯笠
西月
車来

親

○入倫之九下

蓬葦のうらや居る人親三人
蓬葦ひ親のあておふ門外

青蘿
日人

父母

名月や親の手をとる者戸侍
親の親も有るうのを鬼系
親の名で揺りつゝと古の巻
我慈の父母を七日の萩
父母も君々一仏の生蓮白
父母の蓮ハキヤ一星深し
父母と居るの日は一鬼系
又う群家の萩の芽出さふ
かみ餅母と居る一と父慈
初雪よめと夜又う木履うな

木雄
逸水
碓嶺
篤老
卓池
省吾
流考
召波
暁臺
米彦

父

初雪よめと夜又う木履うな

米彦

母

父の名を呼ぶて嬉し
衣
えりやうちむうちうち母の鳥
眞々
花をいつて母りの家もさそひ
とち彦
うらや母は海をさめん茶の香
名澄
故は起てくれき母の森鳥水
茶静
産多小半さちめをさすねうら
保吉
きさちめかおえくれう二日の月
ちる祀
ちるちめハ暑さも知れん
千賀女
大牟や親子ありは後し
篤老
響う家の親子の中や雲の月
布雪

和友

眞々

とち彦

名澄

茶静

保吉

ちる祀

千賀女

篤老

親子

垂乳女

夫婦

賀

杉風のりは水魚すの親子うら
昌作
あ仙を親子の中は花あるん
多代女
果もなき田を耕うる親子は
乎馬
下やちやまぬるりは睦しき
梨翁
涼しさハ田舎はさぬる夫婦は
巢兆
梅枝く奉も忘せぬ夫婦は
秋奉
あさ鳥は夫婦の秋をさくへん孝
蒼虬
夫婦して馬をいつてる者も
涼谷
山里や婿連ありく青月夜
樗堂
響う秋のさうりくる川田は
一具

昌作

多代女

乎馬

梨翁

巢兆

秋奉

蒼虬

涼谷

樗堂

一具

内儀

云傳の婿うらとく十森うる
智見吉をやく仕藤少と若見少
三日月や濃屋の内儀をとりつ
蓄多やをく内儀の立ありき
飯うらとくを中を儀の内儀
雜穀屋の内儀わらき彼若少
物敷や内儀の若く屋をとり
うらほうや向ひの女房あちをみる
子親女房達より侍をけ
縮つるや馬は近よわる女房

女房

紗雲
獲物
とら彦
胡準
多代女
一宵
炉扇
蕪村
とら彦
涼谷

妻

うつらとく女房持ちをまひ取
木おつ連一妻女房や頼るの白
うけら少とくうら妻の比痛少
形場を妻の持ち 務濃うら
妻もはて妻うらあのか 舞
櫓の火の消るゆらや嫁の氣
山家うら娘とる門の柳 少
嫁とつとく相をくえら彼若少
梅うらや嫁と舅のむつと死
花嫁の帽子ゆらとく妻の月

嫁

とら彦
獲物
召波
沢芦
雨林
梅室
季珉
多代女
隆女
應々

妻子

素や子の素教もええつ菜冷

蕪村

子

新奈う留まの素子やまの何

卓池

厚あつやうええあうく男の子

武陵

裕若く常務結く出る子ともうな

双湖

所々啼や里の子何る家の名

有月

子佐等このあうりりのか昔しとら

湖山

初年や飛込小里わ子の多と

梅壽

何ちこのあうり娘いくと里の月

保吉

よき娘おとく恒々木下男

春鴻

發法つて娘のくくる柳うな

とち彦

娘

兄弟

小娘ううとよみかける牡丹は

田都喜

捨子

屠菴様ふり義とえり乳兄弟

護物

兄弟うりをおふや桃のお

名澄

裏町ハ捨子はあぬや後のと

み彦

白雪や捨子よりねと笠のく

護物

浮鴨や義れ男より射遊され

暁臺

雪うちり男はつとての菜が

梅室

かつくりあ男きましく禁うけ

桐雨

昔昔うとし嘉例のふの男うと

良女

梨子咲や着るらゆる病男

夏桂

男



女

あふは女や童をそらるは忌徳
空橋と女のゆりつゝの葉うな
まの重女の裾は障きゆり子
石ありと女のきし柳 小
四形とて柱女うららのさう園小
紫肩し一節よ一本の巻は何所
菊もも爺も起り坂の下
隣とむとり家鴨ニッ小秋日和
焚捨とくはあふはゆりぬやとけ

燕村 召波 長翠 碩齋 弄亀 車来 逸水 菊所 卓池

爺

婆々

姥

美人

うさ炭や巻不腐のむり云
風とるはあふらふ能咲日々
門前紅姥う環しぬ一表 匠
報謝より清あふらふよ里の姥
城のあふらふ松葉巻より姥う扇
我姥の生をうらへて初さくら
いとよひや教知もまぬ門の姥
水仙や美人の改をうらむら
涼中やそれと美人の産むが
梅の花美人をまじり漸二更

梅室 車来 曉臺 梅室 寸風 一夢 梅壽 蕪村 葛古 召波

石女

牡丹あたるや若人うぐの物けし

星谷

厄即し〜石女年とあつ〜

召波

石女の乳汁のる日々藤のしゆ

長彦

石女の何はほもさ〜有〜星は素

篤老

いさよひやとの白〜も月の友

希言

葉と見〜病ふ多あや就の友

馬年

新文〜さそふ友竹あ〜

青嶽

ゆつ〜うお〜る友やは忘少袖

車来

ある友のり〜せ〜る来〜る涼 臺

ちん犯

客

山吹の口を透〜るや庵の 中

葛三

顔

あ〜〜子やま何〜らしゆほをけ

公路

葦葉の密柑も焼や萩の 中

蟻兄

清宵や志を〜〜有〜るあ〜の 中

一具

考の飛〜る〜うけやまの〜ら

茶静

於あきさ萩やは〜るの端の〜ち

蘭更

老同生やあ〜る〜る〜れ〜る

無説

咲梅ま〜る〜る〜り〜りや鳥の 敷

九卦

打〜りをえ〜て〜は〜難のは鳥〜の 形

風芝

鐘〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る 那

應尼

眼

眼のぬ〜る〜る〜る〜る〜る〜る 杜

野揚

眉

鼻

眉の向りく秋の嵐の眼よりくも
本枝や花の姿も眼よりくゆふ
眼のくくは筆く筆よりその山
眼の赤の雲よりぬ秋を照村猶
蓋くく眉より秋のあわれく
眉毛より秋を結く川本男く
あまの目や眉毛よりまき時めく
菊の初より筆く筆より鼻毛く
子猫のまは鼻く筆く筆より
梅くまや鼻ハいつくく老のせし

千崖 二丘 雅堂 秋腸 一肖 太乙 田美 北岱 雄淵 金菜

口

唇

齒

梅くまや雲よりくゆふ人の鼻
火山の口の色くくく夕くく
くくくく唇より秋の初より
梅よりハ口の利きぬめくく
仲人のくくくくくくく
唇の色くくくくくく見く
くくくく唇より入梅く
来ぬ筆くくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

己能張 燕村 春鴻 雅喙 来鷹 葛三 菊南 五明 菱坂 玉光

耳

笛ききく子梅おるききききききき
正身や清のひさるる耳の完
いつくのききききききききき
おるおや風のひさる耳の完
耳訓く只ききききききき
時るさくさくききききききき
き飯や子ききききききき
き鞋ききききききききき
清掃くききききききききき
うけらるる清ききききききき

岐久守
素麻
雀叟
乎焉
奎議
菊塙
東芽
葛三
車西
春器

手

足

膝

膈

山麓場るききききききき
石ころる都るききききききき
炉塞くききききききききき
まきぬききききききききき
きききを披くききききききき
盆の月口ききききききききき
膝よりききききききききき
膝抱くききききききききき
踏ききききききききききき
膝の毛やききききききききき

可景
蕪村
召波
清客
抱儀
碓嶺
丘高
如泡
岱年
輪之

脊中

あまのついでに脊中よりや
りまの脊中よりや
詠人の脊中よりき
髪結よりおまわり
秋月やあまの聖
葉のあまのぬき
涼しくやうら
飯盛の髪結より
若菜子の中より
古はよりまのハ

みき彦
米丸
如陵
太祇
伯先
月居
希言
風芝
樗堂
玉珂

髪

白髪

鬢

鬢

初年や多髪院
あまのついでに
尾花の髪結より
髪のおまのぬき
陽あつたり
いとわたり
まの雪
狗鬢の汗もぬ
白菊小鬢大

閑齋
可厚
蕉雨
暁臺
篤老
菊成
夏桂
福米
莪香
寛雅

軒

おまほ罪をくわゆるいひきうる
空の宿人の森軒を 翠く
風は切り、おの軒や夏の月
醜をちき秋の軒は 紫より
万葉の軒はくわゆる春の月
年をちや夢の空を 画はか
まの月や夢うさむれを山の奥
思ふ夢の来りるを 夜とおきん
雲はく夢のつらや 夜
雲の宿をのくわゆる夏の夜、うる

平角 蕉老 草均 不材 草雨 椿堂 葵亭 草均 茅九 茶静

夢

涙

嚏

涙こそ命くれき 古 枝 うる
書初は史部う涙先あひ
秋のまをの涙もそく 障
年とれを涙りあそ 掃うる
うり 詠り 涙もくき 柳り
嚏の圓のまをれく 濁うる
夕うれのくまめ 一ツも 花の 非
りけき 嚏はくわゆる 梅室
うき時の嚏はくわゆる 草雨
嚏のまをくわゆる 雀 叟

櫻良 ちん彦 葵亭 長齋 季珉 甘行 井眉 梅室 草雨 雀 叟

三十五

痛

山代のまはりの痛もやうれや
痛うらひ籠てまうは女うら
夜更の風は愛うらう肩の痛
草雅
巴流
三生

鶴

○禽獸魚鼈之十

あつたて鶴の自さうく鶴
うらうらう鶴の齡やあふ木葉
玉のうら鶴の志のたゆまうら
さうらうらぬまはれをさか鶴のさ
樗堂
と緒
蜺洲
月臺

鶴龜

鷺

鸚鵡

籠の鶴の空をさううらまはれ
鶴の飛をさうらさうきりけはま
つら飛のふあうらう秋の夕
鶴の飛の秋をさうらや猫のさ
鶴の飛の秋をさうらやある桂うら
玉あうら鶴のさうらうらまはれ
さうらうら鶴の飛をさうら秋の何
鶴の飛をさうらあけさうら秋うら
鶴の飛をさうらあけせんま氷
鶴の飛をさうらあけせんま氷
護物
乙二
東芽
了々
淡水
秋奉
袁丁
詠帰
ひら彦
むら風

鴻

後部の星ふりたのふ勢勢
時つゞく氷のひやも屋を
日の節子時のかげを冬田
流の舞ふ上のそまあるし
時ふれやぬくき羽を川
時流くく日おとさぬ幸
我ふあふをさもきう
秀白うらん梅えりふ
七夕のぬきくやとや
枚川くひくや雪分のそや

護物 奇淵 蒼陽 柯山 茶静 箕山 曉臺 夜鹿 沙明

都鳥

鳩

鷗

涼くくや何所ふくれく都
並ふるもあくくきさう
うきかて涼くくきさう
うら涼やうひき時
蓬のゆきの中
まきの中
うけりかきさう
涼回くくく
我門のあを
都をあられた波の

一司 椿堂 一嘯 田都喜 玉蓬 曉臺 夜鹿 炉扇 茶静 乙二

鴟 鵂

幽 嘯
 呼 亭
 白 絲 女
 五 介
 泥 中
 長 湍
 牛 乳
 護 物
 素 共
 谷 雄

空をこれと波より名を呼ぶの如
 鳥のや呼ぶは鳥の地より人の
 名自や呼ぶのやもや呼ぶ人の
 人の白の人は呼ぶのやも呼ぶ
 名自よと波の波のやも呼ぶ
 河のやも呼ぶのやも呼ぶの
 川物や呼ぶのやも呼ぶの
 巾やも呼ぶのやも呼ぶの
 呼ぶのやも呼ぶのやも呼ぶの
 素共のやも呼ぶのやも呼ぶの

鷺

鷓 鴒

麥 園
 古 翠
 春 路
 蒼 虬
 箕 山
 護 物
 保 吉
 み 彦
 芦 舟
 禾 葉

空をこれと波より名を呼ぶの如
 鳥のや呼ぶは鳥の地より人の
 名自や呼ぶのやもや呼ぶ人の
 人の白の人は呼ぶのやも呼ぶ
 名自よと波の波のやも呼ぶ
 河のやも呼ぶのやも呼ぶの
 川物や呼ぶのやも呼ぶの
 巾やも呼ぶのやも呼ぶの
 呼ぶのやも呼ぶのやも呼ぶの
 素共のやも呼ぶのやも呼ぶの

鶺 鴒

禾 葉
 芦 舟
 み 彦
 保 吉
 護 物
 箕 山
 蒼 虬
 春 路
 古 翠
 麥 園

空をこれと波より名を呼ぶの如
 鳥のや呼ぶは鳥の地より人の
 名自や呼ぶのやもや呼ぶ人の
 人の白の人は呼ぶのやも呼ぶ
 名自よと波の波のやも呼ぶ
 河のやも呼ぶのやも呼ぶの
 川物や呼ぶのやも呼ぶの
 巾やも呼ぶのやも呼ぶの
 呼ぶのやも呼ぶのやも呼ぶの
 素共のやも呼ぶのやも呼ぶの

慈悲心鳥

轉あゝや若菜の莖の刈跡
おとよみは慈悲心をいささか
もえや慈悲心をいささか
慈悲心の目をひくあり教
慈悲心をいささか五月
山をいささかと落る木葉う
をれや山をいささか尾の
山をいささかやうと正れを
去の山をいささか尾の
山をいささかやうと星の

淡水 鶯笠 露谷 以吉 升六 東芽 梅室 菊所 寛雅

山鳥

尾長鳥

水乞鳥

鶏

尾長鳥 尾長鳥をいささか
尾長鳥をいささか日
楠ちるや林へ下り家
初月の水乞鳥をいささか
葉をいささかや水乞鳥
去れはあはるうと川
まはるはあはるうと木
鶏の親子跡や麻の中
巾着は鶏のわらわの葉
葉の層や鶏のわらわの葉

春器 南濤 夏桂 鶯笠 山青 仏仙 東芽 蒼風 有月 可景

鶉

鶉

鶉

雀

鶉

鶉のこゝれ屋より 青 白う那

鶉のこゝれ屋より 太 祇

鶉のこゝれ屋より 宇 橋

鶉のこゝれ屋より 真 侶

鶉のこゝれ屋より 蒼 乳

鶉のこゝれ屋より 梅 室

鶉のこゝれ屋より 卓 池

鶉のこゝれ屋より 風 芝

鶉のこゝれ屋より 寛 雅

鶉のこゝれ屋より 可 都里

鶉のこゝれ屋より 橋 堂

鶉のこゝれ屋より 雨 塘

鶉のこゝれ屋より 應 尼

鶉のこゝれ屋より 大 梅

鶉のこゝれ屋より 士 朗

鶉のこゝれ屋より み 彦

鶉のこゝれ屋より 蛙 堂

鶉のこゝれ屋より 真 侶

鶉のこゝれ屋より 真 侶

鶉のこゝれ屋より 蘭 更

鳥

家雉も盆のちをれ放し一飼 木雄
 夏は入や雉のちをれを死す 多代女
 山雉のせちす年時より友の世 芭蕉雨
 雉も入るおのちもあき家鴨也 春鴻
 雉ハ枯く家鴨のあはれはあはれ 成美
 雉羊四は家鴨の落しは鷄卵也 ちと雄
 夕まの雉くあはれは家鴨の子 百丸
 鷄つらやあはれは家鴨入すれ 淡水
 秋拳

鷺

天狗

狼

虎

木うじや山へりるる山のを 可都美
 池の白や橋を崩しをふし 一肖
 枯草やあはれは陰もあはれ 田駢
 枝子やあはれはあはれは小妻也 蕉雨
 山をけ天狗曇りやハツ手 咲 梅郷
 初雪や天狗木を伐大巖也 巢兆
 初雪子や天狗あはれはあはれ 詠帰
 我園は席外野あはれはあはれ 卧鵬
 手木槌席はあはれはあはれ 詠帰
 狼の口々のあはれはあはれ 篤老

狸

狐

狸の舌や指割梅ありり
 狸の舌よりも明久山の舌
 狸の舌もへきもしし柳か
 池の底狸ありた舌をりし
 四種くらりほき狸の舌榮蓋
 林よりり狸の舌のハ蓋落
 あしきりもめけぬ小家や狸汁
 あしきりしと狐舌喫く戸口か
 舌風を狐の舌をふりりか
 舌をりや狐舌青くしれり舌
 東芽
 月居
 詠帰
 舌彦
 壽翁
 東芽
 護物
 梅壽
 舌風

猪

熊

月の舌は氷ううふさうの舌
 山ありや土手の猪もお舌月
 猪より根根場しれし舌か
 猪除の塚倒せりり五月る
 川舌や猪舌こんと舌守木戸
 猪もよりし舌筆ありし舌
 梅さや猪の杖丈より伸る
 縮つるやいりあつる熊の舌
 舌入熊もゆりりや山の舌
 つる舌や舌山より舌の舌
 一具
 太橋
 葛三
 干萩
 一肖
 淇石
 應尼
 秋拳
 詠帰
 舌風

豕

豕の子をえるも異や
初年や豕の由信入藪の木戸
稲つらや豕もてあまの屋敷
木枯や木うら落つる猿の尻
粗公の猿うつき出る柳うね
静けけ人猿もよりのん
十月の兔と猿の日わ
陽をよ兔もてある猿系

東芽 谷雄 可景 美知彦 暁臺 士朗 之ち彦 時喜雨 鶏路 召波

猿

兔

獺

馬

うらの葉も房の兔のうみ
茅枯や兔の山へかよふ
舟のあや兔のうらま
山宿や兔うけらむそ
五月もや獺平とれ
消くそふたうそ
明月や雲戸をく
川獺のあそむゆる
宵月の獺平
雪の峰うらも水系るる

みち彦 天淮 西月 夏桂 葵足 寸風 紫明 星谷 護物 東芽

五十二

駒

牛

谷雄	乙人	五介	稚篁	巢兆	玄阿	箕山	東芽	宍彦	田都喜
治一瓜初くつハるふくりせり	馬の子は藤白庚里より一尊此峰	あを名を叫くやその尊	佐保姫より駒もよする尊鼻毛ハ	牧の戸の駒は足赤く蘇の如	菱おはしニ尊駒の子をんうを	牛市や古き此枕くくお匠	七一尊牛とまらうや大根曳	あくく火や此の聖中の放れ牛	

猫

犬

春路	未木	政二	祇山	其翼	淡水	士朗	多代女	星谷	和田丸
猫つるや牛の息出長屋門	牛呵る夢も霞むや宵の村	冬の入生聖ホ初ととひしりめ	再福あのをとるくうる九月小	井戸をくや猫のくハ折杜々	夕魚やをくくくは此はあくく猫	枯くや聖をさふ由作不唐の犬	籠新や橋くくく庚る寺乃大	道空や人をとかめる唐の犬	門をさる犬のかまき一籠月

狗

里犬の子をよそとて世ふ干し

大梅

明月や意のあら接る下敷とも

蕪村

犬の子は提灯よりく寂寂か

瓜坊

あやしと狗の子あしく木槿か

芦文

さささとい鮎をつくはりそ

壽翁

尾をわけく鮎の歩り遠野か

遅竹

秋半の雪鮎あつ世とあつるよ

谷雄

未うれや雪まうけあむあ

星谷

稲つとも鮎子そを切らわ

稚萱

ふはしの嵐うよるを年の秋

みち彦

鮎

鼠

初冬や秋ゆく木の葉とそ

巢兆

去の秋や嵐のさやけそゆ

蒼虬

けうくもゆきつゆの秋嵐

夜鹿

あしうる白をよせうり

我車

土竜りの雪の戸尾も被る

宇橋

夕立よりゆく家へくせ玉竜

蛙堂

惟光と接るくまひ扇う

大江丸

新嵐の秋は落るやわりの

斗入

壁の協蟬とるまをいあう

塞馬

協のいとも雪子つけそ枯る

寛雅

土竜

鮎

冬 欣 車 へ

風

海棠よりく打うけや萩の松 獲物
 風一ツうけくくくく都小 西月
 あやめ陽子消よ風のうきよ 呼亭
 我一の風子あきる十秋小 ひろこ
 風もまきこころをれは年くれぬ 露谷
 浅出くや冬くあうる梅るは露 篤老
 わの字や露はわれる井出の石を 東芽
 露も世ま出くは露うる林うま 乙人
 あくまきく露のくくく小露小 上廿 政二
 露の穴子夕のくくく小露小 草雅

蟹

船 虫

守 宮

蟻

蟻

舟虫ははくく微刃日涼水鶴 梅室
 舟虫の砂子子を有り小暑うら 獲物
 山萩やちまきとらつく子信 夏桂
 塔よりむ里の流道や冬日うけ 東莪
 ちくさ白や塔の小石を引出り 雪津
 りまきや構引くく塔のつく 露谷
 塔のゆるくく世まきの流道小 獲物
 世を棧のまきみくくんを 籠 暁臺
 ちくさ子まつらまきくく棧乃関 斗入

五十五

五十六

龜

風ぬくくしをやたすを竹の埃
 いそわくくあつこのおちる埃の宛
 人きりすこむ龜やまのあり
 龜の子はまをその皮のわろく
 龜もあけ仏生る育のふ
 川原まこと葉うけくく龜のそ
 龜の尾は川をくこれままのあ
 魚活く貫り跡るまうふ
 魚む池鼻を並へくあつ魚
 魚をくあつあつあつあつあつ

卧鵬 霞江 太祇 冥々 湖山 梅壽 淡水 寄淵 奈岐沙 湖山

魚

鯛

比目魚

鯉

魚はのの裏家ハ多し梅のあ
 魚河原やうさも林も風のを
 初あや培り種くもわく鯛
 菜のあのをさうさうや中津鯛
 稻藁や鯛のあつあつをみる時小
 鯛の目平針さん人さ林のさ
 鯛魚は袖ももさよまの月
 小あつあつも子孫もさよまの月
 ちあつあつはは目魚のそまよまの月
 鯉はあつあつあつあつあつあつ

一樓 連志 彦彦 塞馬 木海 茶静 梅壽 茅花 淡水 春鴻

海老	鮎
海老正きも諸は露むもくひゆ 春風や子等う初るる海老薙 うきまを引うけく飛小海老 浮籠る鮎の志つむや茶お茶 鮎の飛梢の桂咲りりり 苗代よりれりる鮎の行来り うさおと鮎見もり首をゆ 稻つり法をりりり茶や鹿の鮎 梅島の舟生鮎下も通るりり 坊水不鮎の白中茂りり	秋拳 寶山 輪之 茶静 蕪村 眉山 茶静 斗入 卓池 季珉

烏賊	鯨	鯨
川鯨の芦の根きりる春の舟 塩烏賊の送り首はくわつる 長尾鯨うまハ沙をふりる春田 長尾やあみりる鯨も鯨鯨 瓢箪く鯨ゆきへて春くさぬ さみられや河骨よあは鯨 物 田の中は鯨のとれる暑うり ありまふ白ひも黒くく春き裂 袴のまは鯨放まてわくもん	阿方 来鷹 卓池 谷雄 護物 士朗 泳帰 東芽 何免 西月	西月

鯰

墨田川とともなる魚也 鱈より
大つおねやちつとをる 鯰つこ
おのちつむ秋を溜しと 鯰や
いよのち鯰もつる 在所なる
後の月鯰やあると 同いなり 東
ふまも 鯰も 魚ふ 余をうり 水
ふまれの 雜喉魚 市とる 新江
内川へ 雜喉魚の ちつとる 余を
茶桑春や 雜喉魚の 採はる 冬のは
夕まや 蛇まけまむ 炭の 象

雜喉魚

鮑

輪之
二丘
梅溪
泳帰
鶯笠
應々尼
桃溪
青岐
夜鹿
成美

貝

去る也 屋根より ちつとる 鮑貝
蛇と 象鳥も おねひうめ 水お
蛇むく 蟹も 月をるむ ちつと
冬されや 是より ちつとる 貝の壳
子子のうちや ちつとる 貝のうせ貝
水うらち ちつとる 春の 貝
春うねや 秋のちつとる 貝
ちつとる 貝の 産貝と ちつとる 梅のちつと

月丘
陣象
露谷
蘭更
重厚
亞湍
春鴻
与人

田圃草木之十一

田	籾をくくや秋をま田さうあひと	かち彦
	田と川の石は露むやハ日月	静齋
	いあつと水底底をさる四つと	湖東
	ちりまをさの梅やま田は小波よる	小圃
	田うりり小鷗追行聖をうり	沙明
	土の道そ麻七尺の細うり	保吉
	所如り雀あくるく小まゆ	茶静
	露む日や船くうれるる畑の松	連志
	年よれをるも列よ畑は藤る	草雅

畑

畦	陽をく畑の冬菜の川流	夏桂
	かきくは畦や畦あは苗のあ	圭洲
	新日さく畦や陸のうりそ	草雅
畔	そ雀聖や小松う畔の焼と匂	みち彦
	そ梅や田の畔さく新麻の形	大梅
	そふあたるまや土草のまをれ畔	護物
反圃	ありのそふ月のいさうふ反圃	小圃
	鴨をくや藪うりうりる圃	夏桂
林	月も日毛をくき松の林	梅間
	月も月一林の林すあくるる	左雀

畦

畔

反圃

林

森

木

老木

初花や響の葉より老木よを	少風此木をちあれり月	困ひ本のうれるめとやけり子	かぶの木よりもうつる夕さの秋	うけりかのとつや燈をむ本のうつ和	ち此森人の物々くさる露りけ	との葉はうけを影のらさく誦	より波を飽うくひきを森の奥	時を翼ある春の才也しりのな	風筋を梅よりしてけ林う那
東芽	禾木	玉光	眉洲	十丈	馬佛	南濤	梅室	砂粒	竹妓

古木

枯木

老木よい金存くあつのそ七ねの雪	うろひをふをあねるる老木か	野や菘よさく梅はさる古木うな	縮うけてあきりくさる古木か	晴陰の十もりうつく枯木うか	さあしうろよあしれりるき枯木か	枯木よもくくくくは曇りけ	ま風枯木よわる山路りる	
卓池	霞江	平雄	霞外	小圃	士朗	天涯	黙巢	乙人

木間

春風のあつらふうらむる枯木
我がわらふてさうらぶる木
新雪や木の雪の中枯木より
明月やあふぬ木石をゆく
あけのこころの秋や木石の
さけ月よさうらぶる春の
うら山の梢もあふ月水
あつらふぬれを蟬鳴梢より
吟吟の目とさうらのそく梢
ゆく春や梢よさうらぶる露の系

碩齋 士朗 鯉洲 寛雅 護物 鷄周 南濤 舟静 来鷹 露邨

梢

松

松

檜

松のこころはさうらぶる
老松のこころのあつらふる
うら山の梢もあふ月水
あつらふぬれを蟬鳴梢より
吟吟の目とさうらのそく梢
ゆく春や梢よさうらぶる露の系
松のこころはさうらぶる
松のこころのあつらふる
うら山の梢もあふ月水
あつらふぬれを蟬鳴梢より
吟吟の目とさうらのそく梢
ゆく春や梢よさうらぶる露の系
松のこころはさうらぶる
松のこころのあつらふる
うら山の梢もあふ月水
あつらふぬれを蟬鳴梢より
吟吟の目とさうらのそく梢
ゆく春や梢よさうらぶる露の系

椿堂 白養 凉谷 梅壽 玉光 とも彦 乙二 星谷 良女 白黛

杉

ふらふらや秋の核果は夢見る
一——これおぬ夕日此核 山
のちろちろ此消く夢ある核果
陪雪は日結さそまの核果うる
楠の根は昼も夜もかききく
紅松のありらみききく楠の果
あのみきく楠の大木や風葉ふ
楠の芽の純——木木の心
月もやき杉のありやや心

可都里
志う女
五岬
茶静
寄淵
多代女
川峨
梅壽
獲物
召波

楠

檜

山口の杉のさくらさくらまのさくら
文木ふとまの杉をまきりきり
常々此梢のありや杉のさくら
まのさくら杉のありや田舎さくら
檜の木はまき葉の先のむらり
檜の木はありきりきりや檜のさくら
檜の本や葉のさくら檜のさくら
惟子のありきりまの檜——檜のさくら
ま川や流さくらさくら檜のさくら
うらまのや檜のさくら——あまの風

乙二
省吾
卓池
禾葉
斗入
草鳥
橘叟
夏桂
竹人
越児

榊

下
下

棕

桐

柏

推

棕の木は標をあらう月と我

標堂

標の葉は秋風つらや大井は

汶水

標をひらきたる灯のさゆる桐うを

迦孫

日除くもあらぬ桐や標のさゆる

圭洲

さひさや標は自標の柏の木

保吉

標の木のあらゆるうけを柏の葉

星谷

細をひかれし柏の葉のさゆる

車両

葉てあらゆる葉のさゆる推の本

素檠

推の葉は標のさゆる中を推の本

屋烏

推の木は標をあらうぬ葉のさゆる

旬光



椰

楡

榛シメノ

推の木は標をあらうや約テ葉

菱垣

葉や推のうらまゑ家起は葉

護物

標の葉は標のさゆるや標の葉

み彦

標の葉は標のさゆるや標の葉

不知作者

標の葉は標のさゆるや標の葉

道彦

標の葉は標のさゆるや標の葉

卓池

標の葉は標のさゆるや標の葉

归来

標の葉は標のさゆるや標の葉

霞外

標の葉は標のさゆるや標の葉

一蕙

五月の葉は標の木をあらう葉

禾葉

下

五

椶櫚

椶の木は新もつるこぬ跡もか
椶の木はあはれ余るや縮むくめ
古ちふ椶櫚の皮むくま乃風
うりけりや椶櫚の皮切くま乃
梅もそれや椶櫚は八徳も並ぬやら
やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
秋のふれややくり木の皮むくま乃風

可景 護物 保吉 東峨 露谷 卓池 夙也 雲布 鷄周 護物

蒼寄生

やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
やくり木の皮むくま乃風
秋のふれややくり木の皮むくま乃風

卓池 夙也 雲布 鷄周 護物

草

木うりけりや椶櫚の皮切くま乃風
山草とほりめくあつるの如
草の葉の如く廣るや夏の月
松陰を草みこころ秋やなく
草の根の如くあはれ日
並草みこころ秋やなく
草の根の如くあはれ日
草の根の如くあはれ日
草の根の如くあはれ日
草の根の如くあはれ日

素迪 十丈 旬光 啓山 砂粒 東草 蛙堂 露谷 士朗 卓池

苔

草の根の如くあはれ日

卓池

藻

暑き日やなぐぬ雀の苔の上
とてもし引かき苦あくる子代の松
兼虫の夢うと斗い苔の雨
志つうさや枯藻よりまうふ玉衣
藻の冬てやるやははてはあつり魚
ふ魚や藻のこころみもつうさ
掃ひんと藻屑も春の春の春
浅茅ほくくくく秋のなうりりり
秋の行ききききききき浅茅系
をこそお入るや浅茅の苔 曇

凡鳥 霞外 護物 曉臺 野揚 自友 其峰 士朗 草均 蘭溪

浅茅

蓬

蓬生やあやめ一初の仮 枕
蓬生やあやめ一初
きくくくく蓬は足も落つつり
細くつり蓬糸りや秋さくく
藪裁やいさきさくく秋の山
秋風や一吹たるむ山の藪
降うちるは雪掃うける小藪が
十葉や細きむらふ藪くくく
落栗や風もぬさぬ秋の藪
糸や竹の葉むらる陣の燈

壽翁 閑齋 梅令 寥松 葵亭 且翠 雨塘 駭鳥 珠弓 鰈夢

藪

竹

篁

篁

霄の勢をそそぐり竹の葉
 竹好のほかり勢たる五月は
 うらひまや竹の宵をちとりうけ
 むくひ火のうらまをみり竹の葉
 篁の月よりおとろく世を分る
 篁やそを秋の星のうけとりる
 清くそ山篁をそそり葉のぬ
 篁や明あき秋の月をうら
 瞬のやいたの篁系裁はやうか
 鳴きの麻のちとそお篁の

騏道
 屋烏
 魯石
 むらみ
 卓池
 護物
 昌作
 ちの雄
 文卿
 椿堂

篠

篁

竹羽玉の秋のうらまを篁の香
 うらひまや根篁ついで裁るる
 篁のうらまを根篁ついで裁るる
 篁のうらまを根篁ついで裁るる
 能わらふ常ぬれり葉乃雨
 ちれれ竹の篠をちとり雪を
 ちるちるや風をちとり篠の中
 ちるちるや風をちとり篠の中
 あられ障篁のちとり子ハ
 篁ふらや山をちとりちるちる

卓二
 弄化
 寛雅
 暁臺
 瀨古
 田都喜
 ちる記
 護物
 ちる彦
 可厚

斤押子雪ふる鶯の匿りぬ
秋半の故乃鶯鳴秋を離さるる
玄夫
岐久守

雜之十二

春述懷

朝のふるさつを思ふ春は老るる
是猶も老るる
花の山更盛はあふゆつらぬ
春を思ふ心
孫子思ふあはれをむす枝
巢兆
月居
椿堂

夏述懷

老慵

总是思ふ鳥をわらふおの
むらりたる八十春
花は老をうらむ
友人のうらみ
おのこ
故を思ふあはれ
春を思ふ心
純くれそ人もうらむ
相模
豊女
雨塘
護物
士朗
みち彦
長齋
椿堂
一具

秋述懷

友あるを思ふ
秋は思ふ心
きりぎりすの
あはれをむす

下

おしきの獄屋まつたうれをるる
日はあつらるる

志方ぬ竟ハ其の中いふ家又草堂と

こゝせぬかゝる五とをふりし
古今のを全うはる

我著も草堂と等しくゆれり

あまの海一帯のこゝをるる月夜

気みしうみ樹ををるれり秋の樹

萩桔枝秋の日毎のりたわられ

古今は此の人ありし壺の月

埋さるや老のあつらるの細りゆく
笠のわつれ古今をくくくく

みち彦

乙二

卧鵬

谷雄

茶静

護物

恒丸
月化

冬述懐

老懐

髪をくまぬ人悲むしけるををるる

かきくろり人のふれたる年ををるる

老翁人ありて我より味くなる

おとろくと初々傳炭割いりりか

まは時をくまぬ人悲むしけるををるる
まは時をくまぬ人悲むしけるををるる

まは時をくまぬ人悲むしけるををるる

まは時をくまぬ人悲むしけるををるる

まは時をくまぬ人悲むしけるををるる

みち彦

杉長

寄淵

梅室

護物

まは彦

杉長

閑居

山里好ある古程のふれははるる
引くふれははるるを怪しむる

まは時をくまぬ人悲むしけるををるる

杉長

杉長

春懐旧

写古を木魚くくけをききく死
りれいもききくく木魚をききき

茶静
守三

双ヶ岡

花と我と我とくくくの歌あく

曉臺

鴻の臺

春風も我も涙のあくくくく
古人もゆる様乃木留くくく
雅う泪うけく様をきいそく

沼人
一具
多代女

信玄古城

石くつれて董ハ半れう二の岩

護物

夏懐旧

去のるハ粟津よつく後り介
秋曇るハ峰の海や岸くくく
二人きく友を死んでくつ松魚
夕白の花はぬれくくむくく

保吉
樗堂
成美
日人

中田の光るくく新女の記念のあく
をわくく

暮きぬの友とをく日や時を

護物

秋懐旧

虎ヶ牌前

かきくくくをききくく袖の香
あくくくくく勢の床や花董

みち彦
長齋

高館懐古

りけいつを動くやうく赤の玉 谷雄
菊とくく戻りな産や秋の友 馬年

外川懐旧
虫やうや皮あふらうく井戸の字 獲物

多胡碑
相一葉月毛の物もいおろぬま 露谷

井浪古城
落紫あて古城は落る候外 樗良

冬懐旧
六甲山の禁をさる 一肖
まをやるまをさるまをさる山の月

鎌倉

谷くやうりけおの華 畑 冥々

須磨敦盛塚
有仙のおやおちむくおめ 露谷

安土山懐古

芦枯く麦蔭くちぬ湖のそ 護物

旅もあれそのの遠く障も梅のお 羅城

赤衣く限りつる方の老く旅 冥々

稲のまや旅まをさるのまをさる 椿堂

旅も居く旅も居る門の柳外 岱年

旅

春旅

我々ももも秋もりやらの裁のそ
 うき栴もちやされう節一節菊
 栴もれもそれさくれ一畑芥
 菊菜のつとれて居るや栴の魚
 獨活の香や栴もさき栴の節餉
 栴ハ粒日和はあうはちを望鳴
 芍薬は薔毛もえさる栴 沙 水
 栴もてハ思ぬりもさ一牡丹水
 出物けさる本款と燕や友の栴
 浮陽より栴とてささ一藤入
 護物 乙二 若助 振々 三生 曉臺 葛三 有臺 茶静

夏旅

秋旅

冬旅

ハ穀や栴ハ森うち水物もされ
 武蔵那や菊をとあらの日やう栴
 栴もれハ表の物款本槿水
 盆の集ると人の云の老の栴
 栴もれ一葉ぬらうさ月秋
 栴人ハ草鞋も各一尺の凍
 ちつ空や身ハささるさき栴物
 盆は秋り明て用なき栴森水
 盆の獨りり雲水も栴水のそ
 り多き世や各栴もも十秋持
 曉臺 春鴻 女 龜丸 言々 兔國 みる彦 塊翁 谷雄 定詩 爐扇

旅泊

去のうやほりをいそぐ秋の月

葛三

秋のうらみをいそぐ五月雨

五錐

うらみと夫を婿の初手

梅室

雲をむ日をうけくまの火鉢

川峨

旅寐

鬼をよみ門日宿を不様寐

花縣

朝鳥や夕鳥の宿をいそぐ

士朗

星の秋夜をいそぐ旅寐

葛三

故郷を去るをいそぐ旅寐

谷雄

草枕

赤五葉のあつきうらみ

春鴻

うらみの春河をいそぐ草枕

樗堂

旅人

初雪やり雪ある草

素檠

春葉のうれしき草

蒼虬

その夢や思ふ草

漫々

六月や旅人

樗堂

舟の人の御守ひ

みち彦

旅人を送るうけも

恆丸

旅人の身おあり

篤老

旅人の指投

茶静

旅調度

秋風や人やうらみ

岱青

風薫るまうらみ

巢兆

餞別

既に子儀染うけてるれり宿のみの	曰人
古箒も囉すておろや既陀の中	護物
旅の具の重くぬるもるのよ	夏桂
丈夫坊々もちのくぬるを送る	暁臺
一とをや身ごとく不憚も打て初色	士朗
く終てあやしくめられ旅あるも	
玉屑饒々	
旅衣そけ重なる衣川	宗讚
ある人の南終りを送る	
友山と名をくく河あふのふ	南山

紀あけあ饒々

留るれひくくの人よこる旅	みら彦
--------------	-----

鬼泊り古くくする時

古今の池りれれゆや春	睦
------------	---

田舎庵の都りりを送る

さくおひは吹れくあき旅ゆ	茶静
--------------	----

菊舎古四夜古くぬる

秋よ春よ春をこく裁をくつれ山	護物
----------------	----

七とをうくく古くぬる裁をを送る

浦を山の古くもさくを饒々	、
--------------	---

留別

南窓く掃くの人を送る

涼風の上窓をまわると葉うる

東行る家

あつたれ山は純く夜あつた

つたれ山の山をまわると葉うる

上京る家

りともる耳や荒も存のまう

松毛出りる家

茶の原を翼南を葉うる

越路行ける

岐久守

暁臺

斗入

みち彦

大梅

首途

鳩牛ふりうかゆる翌日

涼しそわ掃くつ日の朝ほけ

接木してむを掃く川に

苗代やそ達の草垣ぬり

廿年を種く老傍みまふ

あつたけ掃くをわたり合

東山の掃くをまわると葉うる

嵐雪と掃く引合不徒掃く

大儀の掃くをわたり

咲くをわたりるをわたりる

護物

樗良

雀史

南濤

暁臺

蕪村

みち彦

贈答

おと秋田表岸をよめ
ふちおふりの角は更る

くはある涼しき子を是るを 八朗

古学堂おあそび

門の松陰志とて子代は友の月 露谷

金呂成就候

松風ハおぬりれお初もそ 護物

早乙女讚

竹の葉は吹くさるお田植笠 曉臺

惠遠法師讚

うりくと榜をこころう夏の月 柳凡

画讚

張良讚

ふるもやうさるもあそむの上 士朗

蕉翁像讚

松崎の笑顔のそれぬ福生也 みる彦

西王母讚

竹保姫の乙女ももろれと 乙二

傾城ノ讚

ゆくとちき風を種とや扇の手 壽翁

鶴讚

くのむく小松の子代やこころん 一茶

関寺小町

枝子手とまのてらるやまの月 蒼虬

伏見人形讚 梅室

深子の土のちたれや桃の花

恵比壽ノ讚 露谷

おあゝりハ方のうきまきふあふ

高野玉川ノ讚 護物

足赤なる水さうけむく深山を

六歌仙之中
小町

おとろつとをかくひらのをー関の雪 草夫

康秀

雲の中よ露の芽はるは白く 一肖

日の筋や玉まき露の布とく乾 露谷

業平

起即や扇の風も秋をみ 葛古

黒主

とー月のうつろや山の雪明き 禾木

月よ人形あくたうとらひはまの 保吉

長居する存も那もろ為玉居か 素後

あ中ハたれぬもぬまーけり葉掃 玉蓬

回文

亦

物名

去り笛や新場の萩の八重保
 来つて門々門々清き日く
大和山城 紀伊岐美濃 三河
 山と山あけきと表の雪見
推 柚 梨子柿 菜更
 志ぬゆつる酒ハ初なる
生絹 紗綾 縞 熨斗目 絹
 生絹 紗綾 縞 熨斗目 絹
旅草 阿 花散里 初紫 若紫
 花散里 初紫 若紫
 子縮さ中。むらぬなつ。さそふ月。
 潤水湛如藍
 朝鳥や一まんゆき岡の色
 梅壽 護物 保吉 護物 露谷 詠歸 岐久守 護物 蕪村

香冠

詩

少年行

春の月初のうらを並へり
 日映萬年枝
 初明れそとる蓬萊の草木か
 沈香亭北倚欄干
 妹起ぬりつる牡丹の絲ある時
 少年行
 依道城く鞆中り車は柳中
 山中無曆日
 常くは為さのちよの宿
 士朗 乙二 月居 卓池 谷雄

下

声振林木
響過行雲

おとよきひ柳をうあゝ本くらり

茶静

行到水止處
卧看雲起時

名を慕ふ人の多きよ山さくら

護物

東集のりら... 秋の落葉のあふりけり

千載集遠たふるりあふりけり

曉臺

山家集... けりぬもあゝぬ家ありひらる

花の秋はとりひりけり

茶静

うけりふは雲のうけりり

甲斐後河

護物

歌

七十六

いせ人ひひうら... 源盛詩そのつゝ和伏家は生ふるはつき本あり

笠よりも葉のめを

今

あう... けりぬもあゝぬ家ありひらる

あき家へハ戻る人あり

岐久守

催馬樂

老婦?

梨園つんは葉も移る

みち彦

白挽唄

あつと... けりぬもあゝぬ家ありひらる

いづの秋家あり花あり

茶静

鹿島童謡

ねんね... けりぬもあゝぬ家ありひらる

唄

下

祝 加 賀

とあるは佳く麻衣の舟後、常賀舟第八
七筋重六千を云ふと云賀舟也

常賀舟女行も舟をせ麻衣舟 護物

市平氏の山産を祝ひて

産すや五日立ても玉の毒 一具

天く代のそや中りく風巾 黙巢

茶代や若のく舟む楠の香 茶静

護物く糸川潤奪の賀

そは終わりきゆりくを恨みく不 みるひ

菊所より移洗賀

不足ありき宿とある移もくく初る 椿堂

福洗賀

何く登や若の白ひも松の香 露谷

婚姻賀

嫁入初月の入江の柳う香 龍石

滝初のをよふとせの初きゆ 伯先

嫁入のそりくを喜むむ野町う香 黙巢

初老賀

若男梅よりさうりふさうり香 樗良

手りもれくふと賀の伸る入 曉臺

馮月四十賀

よりの山もきく人のくくくき 士朗

五十賀

春盛五十賀

昔より百すくありめ作ら

谷雄

崎きを擁子王母の教さくん

曉臺

松子霜茶はるさうりあけり

一茶

老松や又ゆきとあそい

梅室

あのかくすまをつむへ

雉扇

六十を捨てむしよ松露む

李基賀

十くちや先一くち

詠帰

月雪よ表ちをれそおの妻

士朗

古稀賀

六十

七十

還暦賀

七十の眼も土草の袴の

雨塘

検校の古稀祝ひうり須藤

菊成

ゆきさけし枝もわのさく

雅篁

八十賀

梅柳八十うらもあそい

曉臺

君みどり杉うりこれと童

瀾更

冥く八十賀

百年ハおつちと梅

詠帰

米字賀

稲うけを風もむと老の松

蕪村

よこの賀の餅つく

東峨

雁路老母八十八の賀

北光庵

九十賀

種儀のうらなひ年や晴と月

護物

雁門の阿母九十賀

潤三

十株つゝお子代と菊の九と月

曉臺

菊の香もあられと久し久し月

露谷

撰佩て百葉小多のとももくも凡

月臺

あふの金糸の里素共祖母百葉賀

依子の十はく十とよむまの

みる彦



能登七尾府中町中之棚
三階四平

江戸本石町十軒店萬笈堂 英大助 同平吉 藏板俳書目錄

○類題之部

俳諧幾句五百題 春秋庵白雄房撰 小木二冊

同 新五百題 田喜庵獲物撰 中本二冊

同 新々五百題 全撰 全二冊

同 名所千題集 全撰 全三冊

同 今人東風流 洞海舎涼谷撰 具庵一具校 全二冊

同 十万句集 全撰 全校 全四冊

同 續故人五百題 一具庵一具撰 小木二冊

同 類聚 八采園寥松撰 中本二冊

書目

俳諧新發句類聚 全撰

中本二冊

俳諧發句類題 全撰

全二冊

同 古今撰 蕪菴蟹守撰

全二冊

四季發句帳

全一冊

白乳七五三 艸九大人輯

中本二冊

俳諧發句新類題 六合庵万里輯

全一冊

○句集之部

嵐雪句集 一林玄峰集

全二冊

其角句集 坎窩久藏撰

小本二冊

蓼太句集

全六冊

吏登句集

全一冊

巢兆句集

全一冊

完來發句集

全二冊

梅翁宗因發句集

小本二冊

太無發句集

存義發句集

獅子眠發句集

柳居發句集

糗林瓶 甲斐艸丸集

葛里句集 在句の集

全一冊

護物七部集
乙二七部集

小本二冊
全二冊

○季寄之部

戀の栞 葎聖庵北元著

小本二冊

俳諧手挑燈 一名俳諧初心手引草

中本二冊

同 掌中小本

全一冊

俳諧四季名寄

季寄方大成の文より
且名所を附録し

全一冊

俳諧袖鏡

寸珍一冊

季寄便覽

一枚撮

のくむみみ

横本一冊

俳諧通言

小本一冊

○文之部

新編俳諧文集

あ時々名人の
文を採りしむ

全一冊

俳諧變躰一覽

両面一枚撮

袖定規 表俳諧定座変体之図

七初集その有古習俗の變化ある座を
正座引合せ圖として
正座儀の自立と目不見やをわすれしむ

俳諧鰭 自初編今天保迄至凡三十編

○掌中寸珍物 編者より多し付合
集州とあつ

掌中五百題初編

集州初編

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
芭蕉叢句集	其角叢句集初編	嵐雪叢句集初編	乙由叢句集	蓼太叢句集初編						
二編	二編	二編	二編	二編						
三編										
集艸二編	集艸三編	集艸四編	集艸五編	集艸六編	集艸七編	集艸八編	集艸九編	集艸十編	集艸十一編	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
新五百題初編	古今撰	猶追々出刻	○假名遣物目錄	天葉用字格	尚古假字格					
二編	二編	三編		春登上人撰	山本明清大人撰					
集艸十二編	集艸十三編	集艸十四編	集艸十五編	集艸十六編						

万葉集より十卷より十卷の中より一巻と分且他巻の抄の抄とて
 尚古假字格 懐中 折本一冊
 紀元万葉以下古辭のうをを撰

今古假字格

高井八穂大人撰

全

全一冊

對照假字格

長野美波苗大人撰

全

全一冊

定家ゆり遣

新校

小本一冊

音便假字格

春登上人撰

全一冊

古より多く今より形を合を一目不字を異同を

能登七尾
北光庵
潤三



三

